

称号及び氏名	博士（社会福祉学） 藤田 裕一
学位授与の日付	2019年3月31日
論文名	青年期・成人期前期の二分脊椎症者における主観的幸福感や障害の意味の変化に影響する心理社会的要因
論文審査委員	主査 田垣 正晋
	副査 小野 達也
	副査 吉武 信二
	副査 古井 克憲（和歌山大学准教授）

論文要旨

本論文は、青年期、成人期前期の二分脊椎症者の心理社会的研究をレビューした上で、量的研究と質的研究によって、その主観的幸福感や障害の意味の変化に影響する心理社会的要因について明らかにする。

第1章では、二分脊椎症者の健康に関する心理社会的研究を整理して、今後の方向性を検討した。先行研究は、1)二分脊椎症者の認知機能や学習障害、2)親の二分脊椎症者に対する関わり方、3)二分脊椎症者の生活全般や学業に対する支援に関するものに分かれ、いずれも医学モデルの立場から、二分脊椎症の子どもの課題に焦点を当てている。

しかし近年、医療技術の進歩により二分脊椎症者は以前より長く生きるようになり、二分脊椎症者に関する課題やニーズが、子ども時代から、青年期や成人期のものへと広がりつつある。この状況から、本論文は、インペアメントを持ちつつ、幸福感や精神的健康を維持していくかを検討する必要がある、そのためには、社会モデル、アドラー心理学の概念のストレングスやエンパワメントへの応用がふさわしいと考えた。

第2章では、青年期・成人期前期の二分脊椎症者の主観的幸福感に影響する要因に関する2つの量的研究と、1つの質的研究の各々の結果と、その考察を述べた。

1節では、二分脊椎症者の青年期に焦点を当て、アドラー心理学の鍵概念である器官劣等性や劣等感、共同体感覚と主観的幸福感の関係を検討した。質問紙法により、同時期の二分脊椎症者と健常者とを比較した結果、双方において、共同体感覚の高揚は、劣等感を低める、主観的幸福感を高めることがわかった。また二分脊椎症者において、将来の見通しに関する明るさの持つ意味合いが大きいことが示唆された。

第2章2節では、質問紙法により、青年期・成人期前期の二分脊椎症者の主観的幸福感に影響する心理社会的要因について検討した。その結果、共同体感覚尺度の下位尺度であ

る所属感・信頼感、自己肯定感が主観的幸福感の高揚に影響していること、貢献感が所属感・信頼感、自己肯定感の高揚に影響していることがわかった。また未来の目標実現可能性、二分脊椎症者の友人の数も主観的幸福感の高揚に影響していることが明らかになった。この結果を踏まえれば、二分脊椎症者への援助のあり方に関して、1) 本人の潜在的能力をいかし、本人の貢献感を高められる援助、2) 障害者当事者団体の活動への関わり、3) 社会参加を促進する就学・就業支援が重要であることを示唆された。

第2章3節では、幸福感に影響する心理社会的要因を探るために、ロング・インタビュー法による質的研究を行った。その結果、先天性の身体障害を伴う二分脊椎症の調査協力者は、生まれつきの疾患であるため比較的その身体障害の状態が安定しているという内容を語った。障害の状態の変化が幸福度に関連していると回答する人は少なかった。

顕在性二分脊椎症者において、装具、住まい、社会の設備の改善、及び、保健・福祉・医療の専門家の援助が自分の活動範囲の拡大や自立へとつながると語った人は、これらが幸福度に関係すると回答した。また、周囲の人の障害に対する態度、二分脊椎症者とピア関係という、同じ障害を持つ人の存在が幸福度に関係していると回答した人が多かった。

潜在性二分脊椎症者においては、障害の受け容れが幸福度に関係していると語った。自らの内部障害を受け容れ理解した上で、困難さを抱えながら社会的活動しているかが、周囲に伝わるかどうか幸福度に関連するようだった。

第3章では青年期・成人期の二分脊椎症者の現在において、自分の障害に対する意味づけが何を契機に変化するのか、またその意味づけの変化に影響を与えた要因とは何かを明らかにすることを目的に、ライフストーリー法を用いて質的研究を行った。

その結果、通時的変化ならびに意味づけの要旨から、ライフストーリーにおける自己肯定への意味づけとして、1) 障害があるからできない、だけではなく、障害があってもできる部分がある、という気づき、2) 障害を持つ友人との出会いがそれまでの意識を変えること、3) 何かに役に立ったという感覚、4) 障害のない友人との出会いがそれまでの意識を変えること、5) 自分が特殊な存在という意識からの脱却という5点が示唆された。

障害の本質への意味づけとして、1) 就職活動・就職を契機に障害そのものや能力障害、社会的不利を実感すること、2) いじめを契機に障害を意識すること、3) 褥瘡に対するネガティブな意味づけ、4) 生まれ変わったら普通の身体になりたいという願望の4点が示唆された。また、潜在性二分脊椎症者1名のライフストーリーからは、顕在性二分脊椎症者に比べ早期に障害に伴う不利益や生きづらさを実感しつつも、自己肯定感、所属感・信頼感を徐々に高め、周囲とうまく関わっていこうとする長期的な変化が示唆された。

第4章では第1章から第3章までの結果を踏まえ、総合考察を行った。まず1節において結果を整理し、2節において本研究から明らかになった青年期・成人期前期の二分脊椎症者の主観的幸福感や、障害の意味の変化に影響する重要な心理社会的要因に基づき、二分脊椎症者がインペアメントを抱えつつも幸福感を持って生きるための知見を提示した。すなわち、1) 共同体感覚を構成する所属感・信頼感、貢献感、自己肯定感を高めること、2) 自立、社会参加へ結びつく、装具、住まい、社会の設備の改善、及び保健・福祉・医療の専門家の援助であった。

次に3節において、青年期・成人期前期の二分脊椎症者への社会福祉援助モデルに関して、障害者の就労、生活支援に携わるソーシャルワーカーを前提に検討した。モデルの中

心的な考えは、障害者の「インペアメントに帰属されたディスアビリティ」よりも、障害者の「意識化されていないストレングス」を重視することである。これは障害の意味づけの変化やエンパワメントへとつながると考えられる。

二分脊椎症者は失敗体験等を障害に原因帰属させることにより、一時的な心理的安定をえられるかもしれない。だが、第2章と第3章を踏まえれば、「インペアメントに帰属されたディスアビリティ」をより強く意識することは、共同体感覚や自尊感情の低減につながり、本人のストレングスが意識されなくなると推察される。

そこで、ソーシャルワーカーは、「インペアメントに帰属されたディスアビリティ」と「意識化されていないストレングス」とを分け、二分脊椎症者自身が後者に気づくことを促すことが求められる。このアプローチによって、それまで「意識化されていないストレングス」が強くなれば、二分脊椎症者において、社会とつながりたいという意識、行動範囲の拡大につながる。同時に、医療、リハビリテーション、バリアフリー等が結びついていると実感したとき、共同体感覚（自己肯定感、所属感・信頼感、貢献感）が形成されると思われる。このことが幸福感の高揚あるいは障害の意味づけの肯定的な変容になると考えられる。

本研究の意義としては、1) 青年期・成人期前期の二分脊椎症者の主観的幸福感ならびに青年期・成人期前期に至るまでの障害の意味の変化に影響する要因を、量的研究と質的研究を用いて、当事者のライフコースを踏まえつつ明らかにしたこと、そしてその上で、2) 青年期・成人期前期の二分脊椎症者への援助のあり方に関して、共同体感覚等とエンパワメントやストレングス等を関連づけて援助モデルを提示したことが挙げられる。今後の研究の課題の1つは、本研究結果を踏まえた当事者団体でのアクションリサーチである。

学位論文審査結果の要旨

審査委員会は、藤田裕一氏からの学位申請論文「青年期・成人期前期の二分脊椎症者における主観的幸福感や障害の意味の変化に影響する心理社会的要因」について、人間社会システム科学研究科人間社会学専攻社会福祉学分野の博士論文審査基準に照らして厳正な審査を行い、以下の評価と結論に至った。

1. 研究テーマが絞り込まれている

本研究の主題は、青年期及び成人期前期の二分脊椎症（児）者（以下、二分脊椎症者）の主観的幸福感や障害の意味の変容過程、及び、それらに対する心理社会的要因の明確化である。第1章の先行研究のレビュー、第2章と第3章の二分脊椎損傷者に対する実証研究、第4章の支援モデルの構築というように、全体において研究内容が焦点化されている。

2. 研究の方法論が明確である

本研究では、第2章と第3章において量的調査と質的調査が、その目的に応じて適切に用いられている。第2章1節と2節においては二分脊椎症の協力者に対して、主観的幸福感に関する心理尺度による調査を実施し、統計的な手法によって分析をしている。同3節ではロング・インタビュー法によって主観的幸福感の心理社会的要因の具体的な内容を検討している。第3章では、ライフストーリー研究法を用いて障害の意味の変容過程を質的に明らかにしている。特に、2つの質的調査では、各々の理論的立場が適切に記述されている。

3. 先行研究が十分に踏まえられている

第1章において、これまでの研究の現状と課題が適切に整理されている。すなわち、先行研究は、青年期より前の発達期における、1)認知機能や学習障害、2)親の二分脊椎症者に対する関わり、3)二分脊椎症者の生活と学業、親それぞれに対する支援のあり方に焦点化されてきた。本研究では、二分脊椎症者が長く生きるようになり、青年期及び成人期前期における生活が多様化し、新たな心理社会的課題の研究が必要であると指摘されている。そこで本章は、医学モデルの限界と社会モデルの意義を示し、アドラー心理学の整理を行い、そのストレングスやエンパワメント理論への活用という理論的基盤にしている。

4. 結論に至る論理展開が説得的である

本研究は、二分脊椎症者の心理社会的問題に関する実証研究として、説得力のある論旨展開がされている。第1章では、先行研究の到達点と課題が指摘された上で、社会モデル、アドラー理論を踏まえたストレングスとエンパワメント理論を用いるという理論的立場が明示されている。第2章の1節と2節では、二分脊椎症者の主観的幸福感を高めるには、共同体感覚の所属感・信頼感、自己肯定感、未来の目標実現可能性、同種の障害者の友人が重要であることが示されている。3節では、これらの具体的内容が、顕在性二分脊椎症者と潜在性二分脊椎症者各々について検討されている。双方に共通するのは周囲の人々の障害の理解である。前者では外的環境の整備や医療福祉専門職の援助が、後者では、内部障害の受け容れが、それぞれ重要であると指摘されている。

第 3 章では、ライフストーリー法を用いて、障害に対する意味づけの変容過程が検討されている。「障害があってもできる」こと、障害を持つ友人、持たない友人各々の関係性、自分が何かに役に立っているという感覚の重要性が見出されている。また、仕事、いじめ、褥瘡といった場面における障害に対する否定的意味づけも見出された。

第 4 章では、前章までの知見を踏まえて、支援モデルが提案されている。その中心は、二分脊椎症者及び援助者の双方が、「インペアメントに帰属されたディスアビリティ」と「意識化されていないストレンクス」を区分してとらえ、後者が強化されることである。基盤として、自己肯定感、所属感・信頼感、貢献感といった共同体感覚、居住環境を含めた、広義の社会環境の改善が位置づけられている。

5. 研究内容に独創性があり新しい知見を提示している

本研究の独創性は、第 1 に、二分脊椎症者自体を取り上げたことである。社会福祉学においては、様々な障害や慢性疾患の心理社会的課題が研究されているものの、二分脊椎症者に関する知見は極めて少ない。二分脊椎症者は、制度化された社会福祉サービスをそれほど利用しないといわれる。しかし、社会福祉学が自認しているように、サービス利用の有無にかかわらず、障害者の生活世界を把握することは、共生社会やノーマライゼーションの実現につながる。本研究にはこの考え方が通底している。

第 2 に、社会福祉学のストレンクスやエンパワメント理論に、アドラー心理学を取り入れたことは注目に値する。これまで、障害者同士の連帯感や、障害者の社会への帰属意識の重要性は指摘されてきたものの、理論的考察と実証的検討は少なかった。しかも対象の記述にとどまらず、具体的な援助モデルに発展させていることは斬新である。「インペアメントに帰属されたディスアビリティ」と「意識化されていないストレンクス」を区分すること、この基盤に共同体感覚の醸成、居住環境を含めた広義の社会環境の改善があることが示されていることは、モデルの具体性を示している。

第 3 に、方法論的な意義がある。量的調査と質的調査双方の採用は、最近注目されているミックスメソッドと合致する。インタビュー調査において、ロング・インタビュー法とライフストーリー法を使い分けていることも独創的である。

6. 当該研究領域の発展に貢献する学術的価値が認められる

本研究は、社会福祉学における、身体障害者の心理社会的研究の発展に寄与する。近年身体障害者の研究自体が少ないことを踏まえれば、本研究の理論的立場、方法論、得られた援助モデルは、二分脊椎症者以外の身体障害者の研究にも応用できると考えられる。また、障害者差別解消法、改正障害者雇用促進法において、障害者に対する社会的理解の促進が重視されており、本研究は政策展開の基礎研究になる。さらに、本研究が主観的幸福感を扱ったことは、障害者福祉全体における幸福研究の先駆けになるといえる。今後、本研究の協力者たちが属する障害者団体において、その当事者活動がどう展開するかをアクションリサーチとして行えば、本研究の知見のさらなる発展を期待できる。

以上の評価を踏まえ、本学位論文審査委員会は全員が一致して、本論文を博士（社会福祉学）の学位に値するものと判断した。